

論文の要旨

論文題目 明治日本の文明言説と植民地統治
—台湾統治をめぐって—
氏名 許 時嘉
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 22 年 11 月 30 日

本論文は、東洋的伝統に内在する〈文〉＝〈文明〉概念が近代西洋の〈文明〉(Civilization)イデオロギーの到来によって解体し、再構築されるに至る過程及びそのイデオロギー的変容と明治期の〈帝国—植民地〉の統治関係との相関性を究明する試論である。

本論文が明らかにしたいのは、明治期の様々の言論に現れる文明観の多様性を明治日本の下部構造の発展のプロセスに、特に植民地支配との共振しつつある過程において捉えるならば、イデオロギーとしての〈文明〉の動的な変容はどのように観察されうるか、その変容の曲線は何を意味しているのか、ということである。そのイデオロギー性と現実統治の相互連関、相互規定の事実を浮かび上がらせることによって帝国膨張の原理を示唆することは本論文の目的である。本論文が採る方法は、明治維新时期から植民地初期まで日本と台湾の〈文明〉に関して書かれた言説を類型化し、それが社会においてどのような意味を持っていたかを考察することである。具体的には二つの視座の交錯を通して明治期の〈文明〉言説を把握した。一つは東洋西洋の概念上の融合／抵抗／変形である。これについてはウェーバー (Max Weber) の^{イデオロギー}理念型分析の手法を参照し、〈帝国—植民地〉の統治関係における東洋的〈文〉イデオロギーと西洋的文明概念の構造連関に注目した。もう一つは、下部構造との連動から〈文明〉概念の変容を捉えることである。この部分についてはノーマンの唯物弁証法的分析を援用しつつ解明した。具体的分析対象は、明治期の思想家・知識人の著作に記された文明言説や植民地統治者の文明化の統治理念ばかりではなく、被統治者としての台湾人紳士の文明意識、総督府の手によって果たされた「文明化」の中に現れる様々な政治的場面と文化的現象も含めている。

本論文は次の三部（全七章）によって構成される。

第Ⅰ部「明治期の文明理念の諸相」は明治日本のイデオログたちの文明言説をイデオロギー＝観念的政治言論の次元において考察し、その意味合いが変動・変容する条件を分析した。

第一章は明六社の同人たちないし福沢諭吉が代表する明治の啓蒙思想家の文明論を考察対象としている。彼らは国際競争の危機を痛感し、弱肉強食の国際競争から抜け出すために近代西洋の国家体制をモデルとして「文明国」への道を歩んだ、という〈西洋近代〉を実体化する傾向に共通している。

第二章は福沢諭吉と相対化する立場にある西郷隆盛と勝海舟、中江兆民の東洋的道義論の色彩に富む文明言説とその延長線に立つ幸徳秋水と頭山満を分析対象とし、〈精神論的東洋＝前近代的東洋〉を実体化するもう一つの同時代の傾向を確認した。このような意識構

造には、詳しく観察すると自己分裂→再融合（再度の自同性の獲得）という動的な契機が内在していることが確認できる。〈文明〉という言葉の表面に反映する意味とその深層にある内面的思想が、社会経済の基盤（下部構造）と連動しながら、固有の観念の介入（上部構造）によって少しずつずれている。文明という概念はただあるものの状態を形容、意味する静的名詞や観念ではなく、ある種のイデオロギーとして現実の世界に導入される際に、自己実現を志向し、動詞化する力学も自然に伴うことが明らかになった。

第Ⅱ部「膨脹と文明化の欲望」は、他者を文明化する志向の出現と挫折の遭遇、自己意思の再統合の過程を中心に分析した。

第三章において、国粹主義の風潮の中で西洋一辺倒の状況を徹底的に批判した政教社の同人、志賀重昂と内藤湖南が実際に植民地に身を置くや否や西洋から学んだ文明と知識を喧伝し「文明化」の行動様式を無意識に取ってしまう、とその姿を明らかにした。明治20年代の国粹主義は一方では鹿鳴館時代の欧化主義への反撥であり、他方ではアジア諸国への侵略的膨脹活動を支えるイデオロギーであった。西洋中心の近代文明の受容と東洋固有の文明的自意識との交錯による混同／変容は他者を文明化する使命感の生成と大きく関わっていることが明らかになった。

第四章は、湖南の東アジアの復興と相対的な立場に立った後藤新平の進化論的文明論を分析し、台湾経営の旗手・後藤の膨脹理念と植民地経営方針に現れる文明意欲とその屈折を考察した。民族的膨脹の実現を文明国の徴表とする彼は、生物の生命欲を民族国家の膨脹欲と結びつけて理解し、個人の利害意識と国家意識の調和及び民族・国家を単位とする対外拡張の必然性を唱えた。こうした国家至上の現実的な政治観に基づき、後藤は母国の国家利益と発展を図るために、植民地台湾に最も統治しやすい懐柔政策を必要「悪」として導入し、「鯛の目と比良目の目」という植民論理を掲げ、被治者である台湾人の国家意識が薄弱であることを理由に彼らを「文明化」される資格から排除した。ところが、この利害意識に富んだ統治理念は植民地統治の現実遭遇したら再び変形していった。西洋的帝国主義の「資本の蓄積→植民地経営」と比べて、明治期の立ち遅れた資本主義体制による植民地統治は「植民地経営→資本の蓄積」という倒錯的な型を示した。後藤は旧慣維持の政策を通して異民族統治に反感を持っていた台湾人紳士の信頼と安堵を得た一方、植民地におけるインフラの導入や内地観光の台湾人紳士に母国の「文明的社会」を呈示することによって、彼等の資本投資の意欲を煽り立て、植民地統治の厳しい経済的現実を救おうとした。と同時に、文明的な支配者として植民地に君臨するとすれば、統治側に立つ日本人の權威の維持に神経を尖らせなければならない。文明の自意識とイデオロギーとしての文明化理念は植民地統治の成功に不可欠の資本蓄積という現実とぶつかるについその現実に適応せざるをえなくなり、結局は玉虫色にならざるをえなくなかった。

第五章は台湾人紳士の自発的断髪活動をめぐる多様な思考とそれに対する総督府の対応を分析し、「文明」というイデオロギーが統治現実との相互規定、相互連動によって変容することを明らかにした。初期の台湾人紳士の考えにおいて、辮髪／断髪は単なる外形の変化であって「文明」性の有無とは関係ない。このような台湾人紳士たちの文明認識は東洋的〈文〉イデオロギーに繋がっており、文明の意味合いを道徳的・倫理的価値観に還元する傾向がある。しかし後期に至ってはやや変化が生じた。日本の幕末維新期の断髪言説や中国清末の断髪風潮においては民族的、政治的条件を掲げて断髪の合理性を訴える場面が際立っているのに対し、『漢文台日』の断髪言説はかえって民族的・政治的内実を回避し、

曖昧化し、断髪は文明の行動である、という「文明」概念そのものにひたすら集中するように見える。そこでは「文明」概念がある種の保護色として機能している。総督府にとって、断髪は必然性と「文明」概念との結合は台湾人の清朝時代へのノスタルジーを切り離すと同時に、同時代の対岸中国の革命風潮における〈断髪＝漢民族アイデンティティの回復〉という観念連合を回避することもできた。他方、台湾人は文明への積極的な同化を利用して総督府の非同化政策による差別待遇を改善しようとした。興味深いことに、台湾人の自発的断髪運動の言説が顕在化する反面で、断髪を総督府の法的規範の整備によって遂行させようとする保守士の言動も同時に噴出し、自発的断髪運動の合法性を問い、旧慣維持を前提とする施政方針の曖昧性を曝した。この二通りの行動原理は旧慣維持と文明化志向の両面性を共有する日本植民地統治の二律背反を曝け出すことになった。

第Ⅲ部「帝国—植民地体制における〈文〉の意識と〈文明〉認識の融合と拮抗」は、文明言説と現実統治が相互連関、相互規定しながら、なぜ齟齬や断絶、あるいは迂回をしばしば伴うのか、という問題を説明し試みた。これらの齟齬の出現は単に観念上のイデオロギー次元の行き違いではなく、より多くの場合、概念の基体となる状況の現実そのものの偏差と本質連関していることが観察されうる。

第六章では揚文会の分析を通して台湾人紳士における〈文〉を重視するエートスを明らかにした。後藤新平は台湾人紳士を集めた揚文会においては、書房教育の後進性を批判するために『大学』の格物致知を引用して実学重視の理念を説明し、虚文の弊を排除して実学実用を主とする公学校教育を称揚した。しかし、揚文会に参加した台湾人紳士の呉徳功はかえってそれを「教育」を大切にする後藤の姿勢として理解し、実学の導入を戦乱で衰退しかけた文教活動の「復興」事業と読み替えて、固有の文教活動の存続を考えている。さらに、『揚文会策議』に現れた文章を主宰する文昌信仰の肥大化ないし文廟／文昌信仰の混同は、台湾伝統知識階層の〈文〉を重視する精神を浮き彫りにしている。

第七章は、日清戦争前後の漢詩文再生ブームに関する分析を手掛りとして、この〈文〉イデオロギーとそれを外化するものの存在を明らかにした。植民初期に渡台した日本人漢詩人は漢学者的性格に促されて、「文章は国を治めるための重大な事業である」という文章と国家の不可分性を常に強調し、台湾人を「文明化」し、日本に畏服させる意思を抱いて意欲的に台湾に渡った。ところが、漢詩自体は一つの自律的構造体として審美的判断の〈キャンオン〉（古典的規範性）を持っているので、彼らは漢詩文という類型の伝統的規範性——「キャンオン」（中国古典）に近ければ近いほど優れた作品と評価されるという観念を自己撞着的に意識せざるをえなかった。その結果、国文体を重んずる日本ナショナリズムの中で帝国の威光が宣伝される時代にあつて、漢詩の規範意識を固持し、「和臭」に対する強固たる警戒心をもつ日本漢詩人たちは、征服者／漢学者として神経を尖らせざるをえなかったのである。この規範性への自意識が政経的側面（統治者としての権威の証）と審美的側面（和臭の排除による漢詩らしさの完成）を二重に帯びることは、明治ナショナリズムの風潮における文体と国体の融合／分化の連続運動の複雑性を一層深刻化させていく。また、植民地台湾の新旧文学論争においては、知識の啓蒙が文体の改革とは関係なく、むしろ旧文体を放棄することこそ知識の放棄に繋がると主張する連雅堂の漢詩文意識もいまだ勢力を示していた。

以上、本論文の基本的な視座とその展開を簡潔に概観した。明治日本が文明国の一員と

なることを目指して富国強兵の維新成果を挙げていく過程は文明理念と実体的統治の相互規定のプロセスといえる。その相互規定の過程には、東洋的〈文〉イデオロギーや前近代的国家概念などの要素が混在し、両者の間に連続、あるいは齟齬、断絶を引き起こすエネルギーともなった。本研究はこの相関関係の多彩さ、その思わぬ複雑性と内部構造性をあらためて照射することを試みた。植民地統治に活用された〈文明〉という概念が下部構造との連動において変容を遂げていった経緯、そしてイデオロギーの次元と実体統治の次元に生じた齟齬について明らかにした。